

初年次教育における能動的学修の効果

The effectiveness of active learning on first year education of students

杉本 亜由美¹

¹金沢学院短期大学現代教養学科

Ayumi Sugimoto¹

¹Kanazawa Gakuin College

キーワード：キャリア教育，初年次教育，能動的学修，社会人基礎力，異文化交流

Key words : Career education, First year education of students, Active learning,

Basic skills, Intercultural exchange

抄録

情報化，グローバル化，少子高齢化，消費社会等などの変革により，学校教育に求められている姿として，「生きる力」の育成という社会人として自立した人間を育てる観点から，文部科学省はキャリア教育を推進するに至った。

高等教育機関におけるキャリア教育の一環として「初年次教育」が挙げられる。この初年次教育の教育プログラムを研究すべく，本稿では，2017年度の初年次教育科目における筆者の担当授業で実践した能動的学修（アクティブラーニング）の効果を検証した。

本稿は，社会人基礎力を育成する初年次教育授業科目である「基礎力プログラムI」において筆者が実践した能動的学修（アクティブラーニング）の実践報告であり，グローバルキャンパス内における異文化交流グループワークという，新たな教育プログラムを設計，運用し，その効果を，テストという客観的評価と，授業アンケートや受講生インタビューという主観的評価の両側面から検証することができた。

1. はじめに

1.1. 社会人基礎力について

経済産業省は2006年より，学生が社会人基礎力を身につけるべきであると提唱している。社会人基礎力とは，「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」のことで，「前に踏み出す力」，「考え抜く力」，「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されている。さらに経済産業省は，企業や若者を取り巻く環境変化により，「基礎学力」「専門知識」に加え，それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要だとしている^[1]。

滋賀文教短期大学（以下，当短大とする）では上記の社会人基礎力を身につけるための科目として，2012年度より「基礎力プログラムI～IV」を設け，「基礎力プログラムI」では，大学での学修に必要となる「読む・書く・話す・聞く・調べる」

などの基礎的知識や，能動的学修（アクティブラーニング）や課題解決型学習などを進めていく上で役立つディスカッションの基礎を学び，「基礎力プログラムII」では，チームで協働し成果を出すことの意義や方法について学び，「基礎力プログラムIII」では，グループワークによる課題解決型学習を実施し，「基礎力プログラムIV」では，これまでの学びの集大成として，チームでのプレゼンテーションについて学ぶこととしている。本稿では，筆者が実践した「基礎力プログラムI」の授業における能動的学修（アクティブラーニング）の効果について述べていく。

1.2. 初年次教育について

経済産業省が提唱している社会人基礎力育成のために，文部科学省はキャリア教育の一環としての初年次教育を推奨するようになった。

2008年（平成20年）12月に中央教育審議会は，

初年次教育（社会人基礎力の育成プログラム）を、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」としている^[2]。

また、初年次教育の内容としては、スタディスキル、専門教育への導入・学び全般への導入教育、スチューデントスキル・オリエンテーションやガイダンス、情報リテラシー、自校教育、キャリアデザイン、などが挙げられる^[3]。さらに、初年次教育で重視されていることとしては、学生生活における時間管理や学習習慣の確立、受講態度や礼儀・マナー、チームワークを通じての協調性、社会の構成員としての自覚・責任感（社会的市民性）、学生の自信や自己肯定感、などが挙げられている^[4]。

当短大では2012年度より初年次教育を取り入れ、2013年度より科目名を「基礎力プログラムI」とし、そのカリキュラムには、報告書やレポートを書いたりする文章力や、マナー、チームワークを通じての協調性、社会の構成員としての自覚・責任感など、社会人になるにあたって必要不可欠なスキルを身につけられる内容が満遍なく網羅されている。

科目内容に関しては十分に役割を果たしていると言え、筆者が担当した授業においては、上記の初年次教育で重視されていることの中の「スタディスキルを身につける」「学生生活における時間管理や学習習慣の確立」「チームワークを通じて協調性を身につける」が該当する。

1.3. 能動的学修（アクティブラーニング）について

従来の高等教育機関で実施されてきた知識詰め込み型中心の教育から、教員と学生が共に知性を高めていく学生主体型の学士課程教育に変換すべきであることに疑いはなく、学生主体型の学士課程教育を実現するために能動的学修（アクティブラーニング）が推奨されるようになって久しい。

2012年（平成24年）8月に中央教育審議会が示す能動的学修（アクティブラーニング）の定義とは次のようなものである。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れ

た教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である^[5]。」

能動的学修（アクティブラーニング）は高等教育機関における従来の講義形式の授業方法から抜け出すための良い教育方法であることは確かであり、能動的学修（アクティブラーニング）の効果も多数報告されている。これらのことから、高等教育機関の授業に能動的学修（アクティブラーニング）の手法を取り入れることは必須の流れであると考えられる。

当短大においても、初年次教育科目だけでなく、全ての科目において能動的学修（アクティブラーニング）を推奨し、数年前より、全教員による能動的学修（アクティブラーニング）実践報告会や能動的学修（アクティブラーニング）勉強会を実施している。

1.4. チームティーチングについて

チームティーチングとは、複数の教員が協力しながら指導計画を立て、それぞれの役割を分担し、指導していく方法のことである。この方法はチームの教員一人ひとりの特性を最大限に活かした体制であり、それぞれの教員が分担する役割を果たすことで成立する指導形態といえる。

チームティーチングのメリットとしては、多角的に学生の実態が把握できること、一人ひとりの教員の専門性や特性を活かし創造的な授業を実施できること、多様な学習グループを編成することが可能となり、さらに学生一人ひとりの実態に応じた細やかな指導が可能となること、などが挙げられ、デメリットとしては、教員が依存的になる危険性があること、サブとなる教員の学生への働きかけが弱まる可能性があるということなどが挙げられる。

当授業では昨年度、筆者を含む3名の教員によるチームティーチングを実施したが、担当教員内で、全授業の内容や受講生全員の情報共有が必須であるにもかかわらず、担当教員間の引継ぎを上手く行うことができず、授業において不手際を生じさせてしまうことがあった。

2017年度は6名の教員によるチームティーチングとなり、昨年度の反省を踏まえ改善すべく、今年度は担当教員間で共通のメールアドレスを持ち、いつでも情報共有を図れる体制を整えた。また、授業開始前、授業終了後に綿密な打ち合わせを実施した。さらに、授業ファイルを作成し、各授業で用いた配布プリント、全受講学生の成果達成シートなどをまとめて保管し、いつでも閲覧できることとした。

2. 本研究の目的・意義

2.1. 目的

本稿では、第一に、能動的学修（アクティブラーニング）を用いた初年次教育のカリキュラム（プログラム）を設計、運用し、キャリア教育の一環としての授業効果を検証すること、第二に、初年次教育における確認テスト、授業アンケート、学生インタビューを設計、運用して、従来は主観的な面から行われることの多かった効果測定を客観的な面からも実施し、大学全入時代の到来により問われるようになってきた、大学における「教育の質の保証」を検証すること、言い換えれば、当短大の初年次教育プログラムが有効に作用しているか検証することを目的とする。

2.2. 意義

上記「教育の質の保証」においてFD（Faculty Development ファカルティ・ディベロップメント 大学教員が授業の内容や方法を改善し向上させるための組織的な取り組み）の一環であるIR（Institutional Research インスティテューショナル・リサーチ 高等機関レベルでの計画立案や意思決定に有効なデータの分析および提供を行う組織的活動）の観点、つまり学内の様々な情報を収集・分析し、数値化したものを教育、学生支援等に活用するという観点からも、本稿で実践する初年次教育における能動的学修（アクティブラーニング）の効果を数値で表わすということは有効であり、そのことで「教育の質の保証」を実証できるところに本稿の意義を示したい。

3. 研究概要及び調査方法

3.1. 概要

筆者が担当する授業において、毎回テーマに沿った課題を与え、まずは個別で考えた後に、周り

の考えを聞きながら自分の考えをまとめるという、グループワークによる能動的学修（アクティブラーニング）授業を実践し、授業において「読んでまとめる①（文章の要約の仕方を学ぶ）」「読んでまとめる②（文学作品を読む）」「読んでまとめる③（批評文を読む）」の能力が学生に身に付いたかどうかを確認するために各授業の終了時に確認テストを実施した。

さらに、筆者が担当した第6回授業から第8回授業の最終授業終了後には、授業理解度や授業満足度を測る授業アンケート（表2）、日本人学生、留学生の率直な意見を聞く学生インタビュー（表3）を実施した。

そして、本科目の効果を多角的に測定するために3つの調査分析を行った。調査1として、教員による客観的な効果測定である確認テストの結果について分析した。調査2として、学生による主観的な効果測定である授業アンケート調査結果について分析した。調査3として、これも学生による主観的な効果測定である日本人学生、留学生の率直な意見を聞く学生インタビュー結果について分析した。なお、調査2、3は、いずれも先述した「2.1 目的」にある第一目的を検証するために実施し、調査1は、「2.1 目的」にある第一目的に加えて、第二目的にある、従来は主観的な面から実施されることの多かった効果測定を客観的な面からも実施し、「教育の質の保証」を検証するために行うものである（表1）。

表1. 調査概要表

	調査名称	調査内容	
1	確認テスト	授業目標到達度	客観的評価
2	授業アンケート (表2)	授業満足度 学習時間	主観的評価
3	学生インタビュー (表3)	授業内容に関する 意見	主観的評価

3.2. 確認テストについて

確認テストは、各授業の終了後に実施し（合計3回実施）、100点満点として採点した。

確認テストの内容、採点基準は、以下のとおりとした。

第6回授業「読んでまとめる①（文章の要約の仕方を学ぶ）」

確認テストの内容

・新聞記事（500字程度）を読み、180字から200字以内で要約する。

採点基準

- ・字数制限を守っているか。
- ・誤字脱字はないか。
- ・5W3H (WHEN・WHERE・WHO・WHAT・WHY・HOW・HOW MANY・HOW MUCH) に沿った文章で書かれているか。
- ・内容が正しくまとめられているか。

第7回授業「読んでまとめる②（文学作品を読む）」

確認テストの内容

・芥川龍之介『羅生門』を読み、180字から200字以内であらすじを書く。

採点基準

- ・字数制限を守っているか。
- ・誤字脱字はないか。
- ・5W3H に沿った文章で書かれているか。
- ・あいまいな表現は避けているか。

第8回授業「読んでまとめる③（批評文を読む）」

確認テストの内容

・ドナルド・キーン『日本語の美』中央公論社（1993）の一部分を読み、60字から80字以内で要約する。

採点基準

- ・字数制限を守っているか。
- ・誤字脱字はないか。
- ・5W3H に沿った文章で書かれているか。
- ・文章のねじれなどはないか。

3.3. 授業アンケートについて

授業アンケートは、以下の表2の要領で実施した。

表2. 授業アンケート内容

基礎力プログラムI（初年次教育）第6回～第8回授業「読んでまとめる①～③」について該当するところを○で囲んでください。

1. 授業内容をよく理解できましたか。
よく理解できた 理解できた 普通 理解できなかった 全く理解できなかった
2. あなたはこの授業内容に満足していますか。
とても満足している 満足している 普通 満足していない 全く満足していない
3. 授業に対して、1週間あたりどのくらい勉強していますか。
週3時間以上 週1時間以上～3時間未満 週30分以上～1時間未満 30分未満 していない
4. この授業を受けて、感じたことを書いてください。
・授業を受けてよかった点
・改善した方がよいと思う点
上記質問について、評価尺度は大小、優劣の一定の序列を示すリッカートスケール法の5段階評価（5非常にそう思う、4そう思う、3どちらでもない、2そう思わない、1全くそう思わない）を用いて回答。

3.4. 学生インタビューについて

学生インタビューは、以下の表3の要領で実施した。

表3. 学生インタビュー内容

- インタビュー項目
- ・自ら勉強しているか、以前より学習時間は増えたか
 - ・ポイントを掴んで自分の言葉でまとめられるようになったか
 - ・異文化交流はできたか
 - ・全体的な授業の感想
- 上記質問について、学生の率直な意見を聞いた。

4. 授業について

4.1. 授業概要

科目名：基礎力プログラムI（初年次教育）

授業時間数：90分授業×15回

授業の到達目標：

1. 本学の建学の精神や国文学科の教育目的・目標などを理解する。
2. 大学での学修及び国文学科の学習成果の獲得に必要な「読む・書く・話す・聞く・調べる」といった基礎的知識を身につける。
3. 留学生と協働しコミュニケーションを図ることで、異なる文化や価値観などを理解するとともに、自国のことについても発信できるようになる。

4. 留学生との異文化交流や、様々な学生と協働することで、多様性の中で自己の長所を再発見できるようになる。
5. 国文学科専任教員と交流を深め、学習及び学生生活などに課題があった時に、自ら相談できるようになる。

上記のうち、本稿で述べる筆者が担当した授業である「読んでまとめる①（文章の要約の仕方を学ぶ）」「読んでまとめる②（文学作品を読む）」「読んでまとめる③（批評文を読む）」における授業の到達目標としては、2. 大学での学修及び国文学科の学習成果の獲得に必要な「読む・書く・話す・聞く・調べる」といった基礎的知識を身につける、3. 留学生と協働しコミュニケーションを図ることで、異なる文化や価値観などを理解するとともに、自国のことについても発信できるようになる、4. 留学生との異文化交流や、様々な学生と協働することで、多様性の中で自己の長所を再発見できるようになる、5. 国文学科専任教員と交流を深め、学習及び学生生活などに課題があった時に、自ら相談できるようになる、という4項目が当てはまる。

4.2. 対象学生

当短大の国文学科1年生30名であり、その内訳は、日本人学生28名（男子1名、女子27名）、留学生（女子2名）である（表4）。

表4. 学生内訳

国籍	性別	人数	日本語レベル
日本	男性	1	ネイティブ
日本	女性	27	ネイティブ
タイ	女性	1	初級レベル
セネガル	女性	1	初級レベル

4.3. 単位・成績評価

本稿の該当科目である基礎力プログラムIの成績評価は、授業での取り組み45パーセント、レポート試験45パーセント、プレゼンテーション10パーセントにより評価され、1単位が与えられる。これらを6名の担当教員で分割し、それぞれに評価した得点を合算し、総合得点をもとにS（90点以上）、A（80点～89点）、B（70点～79点）、C（60点～69点）、D（59点以下）と評価した。該当科目はチームティーチングであるがゆえに、成

績評価の際、担当教員による綿密な打ち合わせが必要となる。

4.4. 授業の内容

本科目全15回の授業内容は表5を参照されたい。ここでは、筆者が担当した授業である第6回授業「読んでまとめる①（文章の要約の仕方を学ぶ）」、第7回授業「読んでまとめる②（文学作品を読む）」、第8回授業「読んでまとめる③（批評文を読む）」について述べる。

第6回授業「読んでまとめる①（文章の要約の仕方を学ぶ）」では、3つの異なる新聞記事（それぞれに500字程度）を用意し、教員が長文を要約するポイントの説明を行った後に、演習課題（ここでは与えられた新聞記事の要約）に取り組む。学生はグループで意見交換をしながら演習課題を進める。学生が演習課題をある程度終えた後、教員が演習課題について解説し、授業の最後に授業目標到達度を測るための確認テストを行う。確認テストの詳細については前述のとおりである。

第7回授業「読んでまとめる②（文学作品を読む）」では、芥川龍之介『羅生門』にある、下人の心の動きを中心に、内容理解を深める。どの場面でどのように下人の気持ちが変化していくのかということ、グループで意見交換をしながら、小説『羅生門』全体を把握する。学生の理解がある程度深まった後に、授業目標到達度を測るための確認テストを行う。

第8回授業「読んでまとめる③（批評文を読む）」では、500字から800字程度の批評文を3つ用意し、教員が批評文の構成や要約するポイントの説明を行った後に、演習課題（ここでは与えられた批評文の要約）に取り組む。学生はグループで意見交換をしながら演習課題を進める。学生が演習課題をある程度終えた後、教員が演習課題について解説し、授業の最後に授業目標到達度を測るための確認テストを行う。

学生が演習課題を進めている時の注意事項として、日本人学生と留学生の異文化交流が図れるよう、教員が必要に応じて留学生のみで固まらないように促す必要がある。

また、昨年度の授業の進め方と比較して、今年度、新たに取り入れた教育方法として教員から学生へのフィードバックの実施が挙げられる。今年

度の授業においては、学生が演習課題を進めている途中で、教員が学生一人ひとりに対して、「この表現はこうした方が分かり易い」「この部分の要約は的確である」など、気付いたことをフィードバックするようにして、教員と学生のコミュニケーションの時間を増やした。

表 5. 授業の実施内容

1	大学について知る (建学の精神など)
2	ノートの取り方
3	レポートの書き方
4	情報モラルと著作権法 現代社会での情報とのつきあい方
5	資料・情報の収集 (図書館, データベースの使い方)
6	読んでまとめる① (文章の要約の仕方を学ぶ)
7	読んでまとめる② (文学作品を読む)
8	読んでまとめる③ (批評文を読む)
9	ディスカッションの進め方 (ディスカッションの基礎知識を知る)
10	ディスカッションの進め方 (ディスカッションを実践してみる)
11	ディスカッションの進め方 (ディスカッションを検証してみる)
12	プレゼンテーションの進め方 (プレゼンの基礎知識を知る)
13	プレゼンテーションの進め方 (プレゼンの内容を企画する)
14	プレゼンテーションの進め方 (プレゼンに向けて準備する)
15	プレゼンテーションの進め方 (プレゼンを実践してみる)

5. 結果

5.1. 確認テストの結果・分析

以下が確認テストの結果である (表 6)。なお、授業の実施内容 (授業テーマ) が違うので単純比較はできないが、昨年度、筆者の担当授業において実施した確認テストの結果も、参考までに述べておく (表 7)。

表 6. 確認テスト結果【2017 年度】

授業内容	平均 (点)	標準偏差
読んでまとめる① (文章の要約の仕方を学ぶ)	95.4	4.3
読んでまとめる② (文学作品を読む)	96.6	3.3
読んでまとめる③ (批評文を読む)	96.7	3.4

表 7. 確認テスト結果【2016 年度】

授業内容	平均 (点)	標準偏差
ノートの取り方	92.3	6.8
メールの書き方とマナー	96.1	3.2
報告文の書き方	94.6	6.2

分析: 表 6 の結果より、平均点は 9 割以上で、点数のばらつきも少ないことから、ほぼ全員の学生が授業目標に到達していると考えられる。

授業別に見てみると、第 6 回授業「読んでまとめる① (文章の要約の仕方を学ぶ)」の課題である、新聞記事の要約に関しては、ほぼ全員の学生が記事の内容を、字数制限を守りつつ、わかりやすい言葉で 5W3H に沿った文を書いていた。

第 7 回授業「読んでまとめる② (文学作品を読む)」の課題である、『羅生門』の要約に関しては、物語の内容を考えると 180 字から 200 字以内に要約するのは困難ではないかと思われたが、ほぼ全員の学生が字数制限を守って下人と老婆のやり取りについて、上手くまとめていた。

第 8 回授業「読んでまとめる③ (批評文を読む)」の課題である、『日本語の美』の要約に関しても、前述した項目と同様に、ほぼ全員の学生が課題内容であるドナルド・キーン著『日本語の美』を誤字脱字なく 60 字から 80 字以内で要約できていた。

5.2. アンケートの結果・分析

第 6 回から第 8 回の授業終了後に実施した日本人学生、留学生へのアンケート結果は以下のとおりである (表 8)。また、昨年度実施した「基礎力プログラム I」授業アンケートの結果も一緒に述べておく。

授業アンケート結果

2017 年度結果 有効回答数 (29)

質問 1. 授業内容をよく理解できましたか。

①非常にそう思う 14 名 48.3%

②そう思う 14 名 48.3%

③どちらでもない 1 名 3.4%

④そう思わない 0 名 0%

⑤全くそう思わない 0 名 0%

質問 2. あなたはこの授業内容に満足していますか。

①非常にそう思う 12 名 41.4%

- ② そう思う 13名 44.8%
 ③ どちらでもない 4名 13.8%
 ④ そう思わない 0名 0%
 ⑤ 全くそう思わない 0名 0%

質問3.授業に対して、1週間あたりどのくらい勉強していますか。

- ① 週3時間以上 0名 0%
 ② 週1時間以上～3時間未満 7名 24.1%
 ③ 週30分以上～1時間未満 10名 34.5%
 ④ 30分未満 9名 31.0%
 ⑤ していない 3名 10.4%

2016年度結果 有効回答数 (21)

質問1.授業内容をよく理解できましたか。

- ① 非常にそう思う 6名 28.6%
 ② そう思う 14名 66.7%
 ③ どちらでもない 1名 4.8%
 ④ そう思わない 0名 0%
 ⑤ 全くそう思わない 0名 0%

質問2.あなたはこの授業内容に満足していますか。

- ① 非常にそう思う 8名 38.1%
 ② そう思う 8名 38.1%
 ③ どちらでもない 5名 23.8%
 ④ そう思わない 0名 0%
 ⑤ 全くそう思わない 0名 0%

質問3.授業に対して、1週間あたりどのくらい勉強していますか。

- ① 週3時間以上 0名 0%
 ② 週1時間以上～3時間未満 3名 14.3%
 ③ 週30分以上～1時間未満 4名 19.0%
 ④ 30分未満 9名 42.9%
 ⑤ していない 5名 23.8%

表8. 授業アンケート結果

	①	②	③	④	⑤
上段：2017年度値, 下段：2016年度値					
質問1	14名 48.3%	14名 48.3%	1名 3.4%	0名 0%	0名 0%
	6名 28.6%	14名 66.7%	1名 4.8%	0名 0%	0名 0%
質問2	12名 41.4%	13名 44.8%	4名 13.8%	0名 0%	0名 0%
	8名 38.1%	8名 38.1%	5名 23.8%	0名 0%	0名 0%
質問3	0名 0%	7名 24.1%	10名 34.5%	9名 31.0%	3名 10.4%
	0名 0%	3名 14.3%	4名 19.0%	9名 42.9%	5名 23.8%

有効回答数 2017年度(29), 2016年度(21)

分析：授業内容の理解に関する質問項目である「質問1：授業内容をよく理解できましたか」については、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は96.6%であり、ほとんどの学生が授業内容に対して高い理解度を示していた。これは、授業の到達目標が常に明確に示され、さらに、なぜこれらの到達目標を身に付けなければいけないのかという理由、つまりこれらの到達目標は社会人になるためには必須のものであるということを学生が十分に理解し、教員も学生の授業における関心度を確認しながら授業を進めていたことで得られた結果であると考えられる。

授業全体の満足度の指標となる項目「質問2：あなたはこの授業内容に満足していますか」に対して、この質問においては86.2%の学生が「非常にそう思う」「そう思う」と答えており、前述の「質問1：授業内容をよく理解できましたか」の結果同様に、高い学生満足度を得ることができたと解釈できる。

学生の学習時間を問う質問結果について、1週間に3時間以上学習する学生は、一人もおらず、週1時間以上～3時間未満の学生が7名(24.1%)、週30分以上～1時間未満の学生が10名(34.5%)と、半数以上の学生が30分以上、1週間に30分未満の学生が全体の約3割、全く学習していない学生も全体の1割程度という結果であった。

昨年度の結果と比較して、学生全体の学習時間が少々増えてはいるものの、芳しい結果とは言えず、今後は、学生の学習時間を増やすための対策の必要性が認められる。

5.3. 学生インタビュー結果・分析

第6回から第8回の授業終了後に実施した日本人学生、留学生へのインタビュー結果は以下のとおりである。

・自ら勉強しているか、以前より学習時間は増えたか

結果：上記の質問に関して、ほぼ全員の学生が、これまでより学習する時間が増えたと肯定的に答えており、「入学前より自宅や学校での学習時間が増えた」「入学後、図書館で学習する時間が増えた」「以前よりも自主的に学習するようになった」「確認テストをするので、これまでより真剣に授業に取り組み学習するようになった」「確認テストで良い成績を修めたいので、これまでより真剣に授業に取り組みようになり、学習時間も増えた」などの回答があった。

・ポイントを掴んで自分の言葉でまとめられるようになったか

結果：上記の質問に関しても、ほぼ全員の学生が「この授業を受けたことによって今まで上手くできなかったことができるようになったように思う」と答えており、授業の成果が分かりやすい形で表れているといえる。

具体的な回答として、「始めは難しく感じたが今はできるようになったと思う」「指定された字数内で文章をまとめられると要約することが楽しくなる」「文章を読む時に、ポイントを考えながら読み進めるようになった」などが挙げられる。

また、今年度の授業で取り入れた教員から学生へのフィードバックについては、「説明が具体的に分かり易く、おかげで要約ができるようになった」「一人ひとり個別に教えてもらったのが良かった」など、肯定的な意見が多く、受講学生に好評であったといえる。

・異文化交流はできたか

結果：上記の質問に関して、全員の学生が、本授業ではグループワークが多く、日本人学生と留学生が話し合う機会が設けられ、異文化交流体験ができて有益であったという意見であった。

具体的な回答としては、「留学生と話すことで新しい刺激を受けた」「異国の文化を知ることができた」「日本以外の国のことが理解できるようにな

った」などが挙げられる。

・全体的な授業の感想

結果：上記の質問に関して、ほぼ全員の学生が「授業内容は自分自身の役に立った」もしくは「授業内容はこれからの自分に役に立つと思う」と回答していた。

また、本授業で実施されたグループワークについて、「演習課題における他人の考えを知ることができて良かった」「他の人の意見は大変参考になった」と、グループワークを肯定する回答が多かった。

分析：以上の学生インタビューの結果より、どの質問項目においても、学生の回答は授業内容に肯定的で、授業内容を高く評価しているものであった。これより、本授業の内容は学生に有効に作用していたといえる。この結果は確認テストの結果や授業アンケートの結果とも整合しているといえる。

ただし、学生インタビューの結果では、これまでよりも学習時間が増えているとのことであったが、授業アンケートの結果では、1週間に3時間以上学習している学生が皆無であったため、今後は学生の学習時間の確保につながる指導が求められる。

5.4. 2016年度との比較

昨年度は、学生インタビューにおいて、チームティーチングによる担当教員間の引継ぎ不足を指摘する意見があったが、今年度は担当教員の引き継ぎミーティングを2週間に一度程度実施し、綿密な引継ぎが行われたため、教員間の引継ぎ不足に不満を持つ学生の声は無かった。

6. 考察

これまでに述べてきた結果・分析をもとに、以下にその要因を考察したい。

学生が授業で、目標としていた能力を身につけることができた要因として、まず、授業の始めに教員が授業到達目標をしっかりと説明したことにより、受講学生が到達目標を正しく理解できていたことが挙げられる。

次に、確認テストの実施が挙げられ、確認テストを行うことで、学生がより真剣に授業の課題に

取り組むようになり、学生の学びへの主体性が生まれた。このことは、学生インタビューの回答にあった、「入学前より自宅や学校での学習時間が増えた」「入学後、図書館で学習する時間が増えた」「以前よりも自主的に学習するようになった」「確認テストをするので、これまでより真剣に授業に取り組み学習するようになった」「確認テストで良い成績を修めたいので、これまでより真剣に授業に取り組むようになり、学習時間も増えた」という結果にもつながる。

さらに、学生インタビューの回答には、「演習課題における他人の考えを知ることができて良かった」「他の人の意見は大変参考になった」などがあり、授業の課題に取り組む際に、グループワークを取り入れ、それが上手く機能していたことも、目標としていた能力が身についた要因の一つとして挙げることができる。

また、昨年度の授業では取り入れていなかった、本年度から実施した教員から学生への授業内でのフィードバックによる学生一人ひとりへの個別指導も、学生が目標としていた能力を身につけることができた要因として挙げることができる。このフィードバックにより、教員と受講学生全員とのコミュニケーションの時間が増加し、それが学生の授業理解度の高さ、授業満足度の高さ、学生インタビューの結果に結びついたと考えられる。

7. おわりに

以上により、当短大における初年次教育の能動的学修（アクティブラーニング）授業の効果は、授業アンケートや学生インタビューの結果にある

授業満足度や学習時間の伸びによる主観的な見地からだけではなく、確認テストの平均点という客観的な面からも実証できた。このことは、当短大のキャリア教育における「教育の質の保証」を検証できたことにつながる。しかしながら、この結果は当短大においてのひとつの結果に過ぎず、一般性までは示唆できていない。今後は、より多くのデータを収集することに努め、結果を一般化させたいと考えている。

引用文献

- [1] 経済産業省. “社会人基礎力”.
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>,
(参照 2018-7-17).
- [2] 中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて（答申）2008年（平成20年）12月”.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm, (参照 2018-7-17).
- [3] 川島啓二. 初年次教育の展開と GP 事業. 大学と学生. 2008, 528 (54), p.26-27.
- [4] 杉谷祐美子. 初年次教育の「今」を考える～2001年調査と2007年調査の比較を手がかりに～. 大学教育学会第30回大会資料. 2008, p.5.
- [5] 文部科学省. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）『用語集』.”
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf,
(参照 2018-7-17).

(受付日：2018年7月27日，受理日：2018年8月17日)

杉本 亜由美（すぎもと あゆみ）

現職：金沢学院短期大学現代教養学科専任講師

成蹊大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。
専門は日本語教育，キャリア教育。